

特204

980

國文大意

第二版

[中學一學年用]

明治書院編輯部編



株式會社
明治書院
東京



0049345000

0049345-000

特204-980

國文大意

明治書院編輯部編

明治書院

中學1學年用

第2版

昭和10

AHJ

特204

66

980

78

國文法大意

第二版

[中學一學年用]

明治書院編輯部編



株式會社

東京・明治書院・神田

第 20 卷
98 頁

國文法大意

第一版

〔中學一學年用〕

明治書院編輯部

株式會社

東京 明治書院 神田



特 204
980

國文法大意

第一版

[中學一學年用]

明治書院編輯部

株式會社

東京 明治書院 神田





緒言

一、本書は現行の新教授要目に準據し、中學校初學年の教科用書として編纂したもので、我が國文法の大意を生徒に會得せしめて、これを讀書や作文に應用せしめることを主眼としたものである。

一、口語文と文語文との相違を明確ならしめ、實際の應用に當つて誤解誤用なからしめることは、國文法の初歩教授にあつては、最も緊要なことであらう。故に本書は、常に口語と文語とを對比してその異同を識別せしめ、兩々相俟つて我が國語の法則を悟らしめるやうにした。

一、本書はかく教科用として編纂したものであるから、成るべく平易簡明を旨とし、生徒の學力に適應させて實効を多からしめるやう、その説明の範圍、用例等に意を注いで工夫按排した。冀くは實際教授の任に當られる各位の批正を俟つて、益々完璧を期したいと思ふ。

昭和十年五月

五 十 音 圖

	ワ行	ラ行	ヤ行	マ行	ハ行	ナ行	タ行	サ行	カ行	ア行	
ア段	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	片假名
イ段	キ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	
ウ段	ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	
エ段	エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	
オ段	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	
あ段	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	平假名
い段	ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	
う段	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	
え段	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	
お段	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	

目 次

一	口語と文語	一
二	文と單語	二
三	名詞	七
四	代名詞	一〇
五	動詞	一三
六	形容詞	一八
七	副詞	二三
八	助動詞	二九
九	助詞	四一
一〇	接續詞	五四
一一	感動詞	五七
一二	動詞の活用	五九

- 一三 動詞の語形……………七四
- 一四 形容詞の活用とその語形……………八二
- 一五 助動詞の活用とその語形……………八九
- 一六 注意すべき助動詞・助詞の用法……………九六

〔附〕 動詞形容詞と助動詞・助詞との連續表

國文法大意 第二版

一 口語と文語

○現今行はれてゐる文體に、口語體と文語體との二種がある。

水が流れる。	水流る。
川風が涼しい。	川風涼し。
波の音も遠く聞える。	波の音も遠く聞ゆ。
美しい花が咲いた。	美しき花咲けり。
彼は學生である。	彼は學生なり。

右の例の上段は口語體で、下段は文語體である。

コノ編ハ學習上ノ參考事項ヲ
隨意ニ書入レルノニ便ニシタ

○口語體は日常の談話に用ひる言語で書き表はしたものであり、文語體は昔の言語、即ち文語を用ひて書き表はしたものである。

○口語體にも、文語體にも、これを書き表はすのに一定の法則があつて、口語體の文は口語の法則に依らなければならず、文語體の文は文語の法則に依らなければならぬ。この法則を文法といふ。

二 文と單語

○我我は主に言語によつて相互の思想を通はせるものであるが、まとまつた思想を表はした言語でなければ、十分にその意思を通ずることが出来ない。そのまとまつた思

想を表はした言語を、文字で記したものが文である。

- 一 日 は 海 の あなた から 昇る。(口語)
- 二 清い 水 が 岩 の 間 を 流れる。(口語)
- 三 櫻 は 春 咲く 花 なり。(文語)
- 四 父 は 山 を 越え て 町 に 行く。(文語)

右の例は、いづれも一の文である。

○文は或意味を表はす一つ一つの語によつて連ねられる。この一つ一つの語を單語といふ。即ち右の例一は七の單語から成り、例二は八の單語から成り、例三は六の單語から成り、例四は九の單語から成つてゐる。

○一の單語も、よくよくその成立ちを吟味する時は、數單語の合さつて成つたものが少くない。

春風 松林 山里 田舎道 葦屋根 繪日傘

心細い 物憂い 氣高い 心好し 見苦し

物語る 氣遣ふ 立ち退く 取り締る

右のやうに、數單語の合さつて一單語となつたものを熟語といふ。

○熟語の中には、同一の語の重なつて成つたものがある。

山山 人人 時時 様様 追ひ追ひ 増す増す

見る見る 泣く泣く

右のやうに、同一の語の重疊した熟語を、特に疊語といふ。

○又、熟語の中には、一單語の頭、又は尾に、獨立しては表はれない助語の添はつて成るものがある。

お手 み國 さ迷ふ た易い か弱い ひが自

さし迫る あひ濟む いち早し

樂しさ 親しみ 嬉しげ 我ら 子ども 友だち

春めく 黄ばむ 頭だつ 露けし

右のやうに、一單語の頭、又は尾に連接して熟語を成すけれども、獨立しては表はれない助語を接頭語接尾語といふ。

○左の文中から熟語と疊語とを摘出して見よ。

一 春雨がしとしとと降つて、日中でも肌寒い。(口)

二 丸木橋を渡つて行くと、雑木林の中からいろいろの小鳥の聲が聞える。(口)

三 仔狗はよちよちと這ひ出し、温かな母親の乳房を慕うて、頻りに啼き廻る。(口)

接頭語・接尾語は冠辭・尾辭ともいふ。

四 國國より産するさまざまの珍しき品品を集めて楽しめり。(文)

五 朝日に匂ふ山櫻ほど美しきものはなし。(文)

◎左の文中から接頭語と接尾語とを摘出して見よ。

一 淋しみのある聲で、あはれげに歌ふ。(口)

二 村中の人人が小高い岡に登つて、もろ手を舉げて萬歳と叫んだ。(口)

三 私どもの友だちの中にも、井上といふ姓の人が三人もある。(口)

四 さ夜更けて、ほの暗き燈の影ものさびし。(文)

五 おほ君のおん爲めには、捨つる命も惜しからず。(文)

○單語をその語の用ひ方によつて、左の九の種類に分つ。これを九の品詞といふ。

名詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞 助動詞
助詞 接續詞 感動詞

三名詞

○一 「蝶が花に戯れる。」(口語)の「蝶」「花」などは、物の名を表はす語である。

二 「勉強は幸福を生む。」(文語)の「勉強」「幸福」などは、事の名を表はす語である。

右のやうに、事物の名として用ひられる語を名詞といふ。
○名詞の中には、事物の數量、又は順序などを表はす名として用ひられるものがある。

百 千 三年 五人 十種 五十番 八百里

壹萬號 幾百圓 數十回

右のやうに、數量・順序などを表はす名詞を、別に數詞ともいふ。

◎左の文中から名詞を抽出して見よ。

- 一 櫻は花が散つてから、葉を生ずる。(口)
- 二 親の恩は山よりも高く、海よりも深い。(口)
- 三 海岸の砂山の上に、小松が三本生えてゐる。(口)
- 四 田舎の人は正直で、質朴で、萬事が深切である。(口)
- 五 勤勉は富貴の基にして、怠惰は立身の敵なり。(文)
- 六 氣候よろしく、頗る衛生に適したる土地なり。(文)
- 七 東京と京都と大阪とを日本の三府といふ。(文)

○名詞は、熟語から成るものが殊に多い。

山山 人人 山鳥 木鼠 日暮れ 夕映え
 落ち穂 嬉し涙 遠山 薄霞 お文 み心 ご殿
 おん車 おほ君 おほみ恵 生徒ら 親たち
 宮がた 子ども 歌など

○漢語の熟字も、また、熟語の名詞と見なすべきものである。

修身 立志 勉學 無慈悲 不思議

○又、二の名詞が「の」「が」「つ」等の語によつて連ねられたものも、一の熟語の名詞と見なすべきものである。

源の義經 鬼界が島 天つ風

◎左の文中から名詞を抽出して見よ。

- 一 富士山の頂上で、一ばん高い峯を劔が峯といふ。(口)
- 二 舟を浮べて霞が浦を漕ぎ廻り、一日の清遊を試みた。(口)

「お」「み」「ご」「おん」「おほ」などは、名詞に崇敬の意を添へる接頭語である。「な」「ら」「たち」「がた」「ども」「など」などは、名詞に複數の意を添へる接尾語である。

- 三 馬洗ふ里の男たちの頭の上に煙を残して、汽車は第一の鐵橋を渡る。(口)
- 四 労働は身體を強健にし、精神を爽快にする益あり。(文)
- 五 連る峯峯は夕日のみ光を浴びて、千態萬狀の姿を現はせり。(文)

○名詞の中で、「山」「川」「將軍」「神社」などのやうに、同類の事物に共通して用ひられるものを普通名詞といひ、又、「日本」「東京」「乃木希典」「明治神宮」などのやうに、同類の中で、特に一事物に限つて用ひられるものを固有名詞といふ。

四 代名詞

○一 「汝は我を誰の子と思ふか。」(文語)の「汝」「我」「誰」など

は、人の名に代へていふ語である。

二 「それをここからあちらへ運べ。」(口語)の「それ」「ここ」「あちら」などは、事物、場所、方角などの名に代へていふ語である。

右のやうに、名詞の代りに用ひられる語を代名詞といふ。

○代名詞の中には、名詞から轉じたものも少くない。

君 僕 私 貴殿 拙者 先生 小生
 我 我 誰 誰 此處 彼處 此方 彼方 我ら 汝たち
 私ども あなたがた

○代名詞の中で、「我」「汝」「彼」「誰」などのやうに、人の名に代へて用ひられるものを人代名詞といひ、又、「これ」「それ」

「かれ」「いづれ」「ここ」「そこ」「かしこ」「いづこ」「こなた」「そなた」「かなた」「いづかた」などのやうに、事物・場所・方角などの名に代へて用ひられるものを指示代名詞といふ。

●「これ」「それ」「かれ」「たれ」などの代名詞は、又、「こ」「そ」「か」「た」とのみもいはれる。

この人 その身 かの家 たが子

○左の文中から代名詞を抽出して見よ。

- 一 そこにある硯箱と、あそこにある巻紙とをここに持つて来い。(口)
- 二 誰か、私どもの荷物をあちらへ運んでくれまいか。(口)
- 三 私の帽子はどこにあるのか。この帽子は誰のだらう。(口)
- 四 汝は、彼の人と、いつの頃より交はれるか。彼はいづこの人なるか。(文)

口語に多く用ひられる代名詞としては、なほ「あれ」「あそこ」「こちら」「あちら」「だれ」「どなた」「どれ」「どこ」「どちら」などがある。

なるか。(文)

- 五 我等は君の来るを彼處にて待たむ。(文)
- 六 かなたに見ゆるは、いづれの山脈か。こなたに流るるは、何といふ河か。(文)
- 七 その説を聞くもの、いづれも彼の博學に驚けり。(文)

○以上に説明した名詞・代名詞は、又、體言ともいはれる。主に事物の形體を表はす語であるからである。

五 動 詞

- 一 「旅人が峠を越えて行く」(口語)の「越え」「行く」などは、事物の動作を表はす語である。
- 二 「烟のある處には火あり」(文語)の「ある」「あり」などは、

事物の存在を表はす語である。

右のやうに、事物の動作存在を表はすに用ひられる語を動詞といふ。

○動詞は、用ひ方によつてその語の末がさまざまに變るものである。

一 口語の動詞の例

- 〔咲く〕 咲かう 咲いた 咲き亂る 咲く時 咲けば
- 〔飛ぶ〕 飛ばう 飛んだ 飛び去る 飛ぶ鳥 飛ばへば
- 〔待つ〕 待たう 待つた 待ち明す 待つ間 待てば
- 〔起きる〕 起きた 起きる頃 起きれば
- 〔流れる〕 流れた 流れる水 流れれば
- 〔来る〕 來た 來る人 來れば

二 文語の動詞の例

- 〔書く〕 書かむ(ん) 書きぬ 書く 書けば
- 〔讀む〕 讀まむ(ん) 読みぬ 讀む 讀めば
- 〔落つ〕 落ちむ(ん) 落つ 落つる時 落つれば
- 〔受く〕 受けむ(ん) 受く 受くる時 受くれば
- 〔見る〕 見む(ん) 見る 見れば
- 〔有り〕 有らむ(ん) 有り 有る時 有れば

右のやうに、その語の末の變化するのを動詞の活用といひ、そして、その變化する部分を語尾といひ、變化しない部分を語根といふ。(活用のことは後に説く)

◎左の文中から動詞を抽出して見よ。

「書かむ」「讀まむ」などの場合は、「む」を「ん」と發音する。それ故、「ん」と書いてもよいのである。

- 一 風が吹けば花も散らう。(口)
- 二 人の馳せて行く方へ犬が走る。(口)
- 三 水に溺れた人が聲をあげて救を求めた。(口)
- 四 山を越え、谷を渡りて、漸くに人家ある處に出づ。(文)
- 五 雨も止み、空も晴れて、日は輝き、蝶も舞ひ、鳥も歌ふ。(文)

○動詞も、また、熟語から成るものが多い。

- 物語る 身構ふ 飛び立つ 見分く 打ち破る
- 取り亂す 涙ぐむ 黄ばむ 春めく 芽ぐむ
- 高ぶる 寒がる 薄らぐ 荒だつ

○動詞は、又、そのままいひ据ゑられて名詞となることがある。

- こほり〔氷〕 かすみ〔霞〕 ひかり〔光〕 めぐみ〔恵〕

をしへ〔教〕 あそび〔遊〕 けむり〔煙〕

◎左の文中から動詞を抽出して見よ。

- 一 古びた帽子を被り、穢れた靴をはく。(口)
- 二 港へ近づくと、船頭の氣が弛むのか、逆捲く波に船を覆されることがある。(口)
- 三 一家が思はぬ災難に出あひ、たよる所もなく、途方に暮れてゐる。(口)
- 四 心を鎮めて、落ちついて考へて見るがよい。(口)
- 五 庭の景色も秋めきて、萩の下葉もやうやう色づきぬ。(文)
- 六 都を離れたる僻地に住む人ほど、體力勝れたり。(文)
- 七 人の過に鑑みて、我が行を正すべし。(文)
- 八 身の疲を覺えて、頻りに眠を催したれば、暫く一室に籠りて、勞苦を休めたり。(文)

六 形容詞

○一 「流の早い川は、水が清い。」(口語)の「早い」「清い」などは、事物の状態を表はす語である。

二 「虎は強く、羊は弱し。」(文語)の「強く」「弱し」などは、事物の性情を表はす語である。

右のやうに、事物の状態性情などをいひ表はすに用ひられる語を形容詞といふ。

○形容詞も、また、動詞のやうにその語の末が變化するものである。

一 口語の形容詞の例

〔青い〕 青く見える 青い色 青ければ

〔近い〕 近く聞える 近い村 近ければ

〔寂しい〕 寂しく思ふ 寂しい夜 寂しければ

〔楽しい〕 楽しく遊ぶ 楽しい日 楽しければ

二 文語の形容詞の例

〔高し〕 高くば 高し 高き山 高けれど

〔善し〕 善くば 善し 善き人 善けれど

〔貧し〕 貧しくば 貧し 貧しき家 貧しけれど

〔正し〕 正しくば 正し 正しき人 正しけれど

右のやうに、その語の末の變化するのを形容詞の活用といひ、そして、動詞と同じく、その變化する部分を語尾といひ、變化しない部分を語根といふ。(一四頁一五頁参照)

○形容詞も、また、熟語から成るものが多い。

心強い 後暗い 胸苦しい 見易い 愛らしい
口惜し 薄暗し 暑苦し 赤し 黒し 女女し
煩はし 痛まし 勇まし 重重し

◎左の文中から形容詞を摘出して見よ。

- 一 日は暖く、風もなく、散歩にはよい日である。(口)
- 二 羽の白い、嘴の赤い小鳥が、美しい聲で鳴いてゐる。(口)
- 三 大人しい人でも、時には荒荒しく振舞ふことがある。(口)
- 四 友だちが多ければ、楽しい事も多いが、悲しい事も少くな
る。(口)
- 五 彼は幼き時より、背も高く、力も強し。(文)
- 六 雨烈しく降り、雷夥しく鳴り轟きて、恐ろしき夜なりき。(文)

- 七 涼しき波風、ま白き帆影、目に入るもの皆清し。(文)
- 八 彼は色浅黒けれど、目鼻立よろしき顔にて、雄雄しく見ゆ
る人なり。(文)

○動詞・形容詞の名は、意味の上から附けたものであるが、その區別は主としてその活用の形によるものである。例へば、左例のやうに意味の相對する語でも、その活用の形によつて、一方は動詞とし、一方は形容詞とするのでも知られる。

(動詞) 有り 富む 老ゆ 違ふ 満つ
(形容詞) 無し 貧し 若し 等し 空し

○以上に説明した動詞・形容詞は、又、用言ともいはれる。主に

事物の作用を表はす語であるからである。

○「善く」「嬉しく」などと、形容詞の語尾が「く」に活用して、その下に動詞の「あり」が添はつて、「善くあり」「悪しくあり」となる時は、音便でその「く」と「あ」とが約つて「か」となり、「善かりき」「嬉しかりき」(以上文語)「善かつた」「嬉しかつた」(以上口語)などといはれることがある。かやうな熟語を形容動詞と名づけて、動詞の一種と見なす。

- 長くあり……長かり(文語)……長かつた(口語)
- 浅くあり……浅かり(文語)……浅かつた(口語)
- 涼しくあり……涼しかり(文語)……涼しかつた(口語)
- 悲しくあり……悲しかり(文語)……悲しかつた(口語)

發音の便から、他の音に呼びかへられることを音便といふ。

○左の文中から動詞・形容詞・形容動詞を摘出して見よ。

- 一 暑からず、寒からず、誠によい氣候だ。(口)
- 二 風は強かつたが、損害は少かつた。(口)
- 三 殿しく取り締りたれば、違犯者は一人も無かりき。(文)
- 四 口にいふ事は易かれど、身に行ふ事は難きものなり。(文)
- 五 遅かれ速かれ、悪しかる事はいつしか露はるべし。(文)

七 副詞

○一「暫く考へて、漸く答へる」(口語)の「暫く」「漸く」などは、下の動詞の「考へ」「答へる」などの意義を限定する語である。

二「山はいよいよ高く、路はますます険し」(文語)の「いよ

いよ「ますます」などは、下の形容詞の「高く」「險し」などの意義を限定する語である。

右のやうに、動詞形容詞の意義を限定するに用ひられる語を副詞といふ。

○副詞は、又、他の副詞の上に添はつて、その意義を限定することがある。

稍や暫く考へた。(口語)

いと懇に教へたり。(文語)

甚だ稀に行はる。(文語)

○副詞は、又、中に他の語を隔てて、下の動詞形容詞の意義を限定することがある。

もう花も散つた。(口語)

暫く時の到るを待て。(文語)

更に木も草もなし。(文語)

○副詞には本来のものもあるが、名詞・動詞・形容詞、その他いろいろの熟語から轉用されるものが殊に多い。

一 本来のもの

漸く晴る	殆ど死す	暫く考ふ	必ず泣く
未だ見ず	甚だ痛む	頗る善し	忽ち消ゆ
稍や衰ふ	既に盡く	遂に敗る	専ら習ふ
猶多し	愈寒し	益高し	屢病む

二 轉用のもの

終日働く	一切知らぬ	餘り少しい	善く戦ふ
久しく習ふ	誠美しい	常に賑ふ	極めて白しい

頻りに聞える痛む 日に長ずる衰ふ 靜靜と退出す物語る
不幸にして死す敗る 巍然として立つ聳ゆ

右はその一斑を示したのに過ぎない。他は推して知れ。

◎左の文中から副詞を抽出して、その副詞がいづれの語を限定してゐるかを答へよ。

- 一 以前に父から聞いたことがある。(口)
- 二 風がそよそよと吹いて、やうやう秋めいて來た。(口)
- 三 ただ物を學ぶだけで、應用の才がなければ、少しも學ばないのと同じだ。(口)
- 四 しほしほと語るを聞きて、いよいよあはれを催したり。(文)
- 五 最早夜も明けたるにや、人聲かすかに耳に入る。(文)
- 六 志を立てて只管勉強せば、終には成功の日あるべし。(文)

口語に多く用ひられる副詞には、「もう」「きつと」「やつと」「ずつと」「もつと」「ちやうど」「しつかりと」「とて」など數多ある。

七 聊か思ふよしあれば、今より専ら音楽を修むべし。(文)

○形容詞が副詞に轉用される時は、「善く」「嬉しく」などと、その語尾が「く」に活用するものである。その「く」の下に動詞の「あり」が添はると、音便で「善かりき」「嬉しかりき」(以上文語)「善かつた」「嬉しかつた」(以上口語)などとなり、それを形容動詞と稱することは前に述べた。(参照)

○「靜かに」「詳細に」「爛漫と」などと、「に」「と」の附く副詞も、また、下に動詞の「あり」が添はつて、その「にあり」「とあり」が約つて「なり」「たり」となり、「靜かなり」「詳細なり」「爛漫たり」などといはれることがある。これらも、また、形容動詞と稱する。

明かにあり……………明かなり(文語)
 遙かにあり……………遙かなり(文語)
 鮮明にあり……………鮮明なり(文語)
 深切にあり……………深切なり(文語)
 憤然とあり……………憤然たり(文語)
 赫赫とあり……………赫赫たり(文語)

口語では、形容動詞の語尾の「なり」が活用して「なる」となる時は、音便で「る」が省かれて「な」だけとなることが多い。
 静な夜だ。
 賢明な人である。
 盛大な會合であつた。

○左の文中から形容動詞を摘出して見よ。

- 一 近來稀なる美談として、世人が少からず感歎した。(口)
- 二 些細な事に腹立つものは、遠大な志望は達せられない。(口)
- 三 昨夜の暴風は甚だ強暴なりしが、殆ど損害は無かりき。(文)
- 四 渺茫たる海面を眺めて、日頃の不愉快なる憂鬱を忘れたり。(文)

○五 高大なる建築物櫛比して、街衢整然たり。(文)

八 助動詞

○一 「人には笑はれ、友には捨てられる。」(口語)の「れ」「られ」などは、上の動詞に添はつてその意義を助ける語である。

二 「人を怨みず、自らを責むべし。」(文語)の「ず」「べし」なども、上の動詞の意義を助ける語である。

右のやうに、動詞に添はつてその意義を補ひ助ける語を助動詞といふ。但し、助動詞には、稀に名詞・代名詞・形容詞などにも添はるものがある。

奈良は古の都だ。(口語)

東京は日本の首府なり。(文語)

父は大藏大臣たり。(文語)

私の帽子はこれだ。(口語)

第一の勉強家は彼なり。(文語)

彼も性質は善きなり。(文語)

○助動詞は、又他の助動詞の下にも添はるものである。

學ばれまい。(口語)

考へさせられた。(口語)

教へられたりき。(文語)

褒められたるなるべし。(文語)

○助動詞は、動詞形容詞などのやうに、その語形を變化して

種種に活用するものである。

一 口語の助動詞の例

(殺さ) れた れる ければ

(覚え) られた られる られれば

(折ら) せた せる せれば

(知り) たくば たい たければ

二 文語の助動詞の例

(教へ) られず らる らるる時 らるれば

(讀ま) しめず しむ しむる時 しむれば

(受け) させず さす さする時 さすれば

(起き) たらば たり たる時 たれど

(言ふ) べくば べし べき時 べけれど

○普通に用ひられる主なる助動詞を、その表はす意義によつて分類し、左に口語と文語とを對比してこれを例示しよう。表中の平假名は文語の助動詞を表はし、片假名はその口語を表はす。

一 受身の意を表はすもの

文語	口語	用
る	レル	孤兒が人に救はる。(救ハレル) 風に帽子を取らる。(取ラレル)
らる	ラレル	盜賊巡查に捕へらる。(捕ヘラレル) 妹は母に愛せらる。(愛セラレル)

二 可能の意を表はすもの

文語	口語	用
る	レル	船にても行かる。(行カレル) 片足にても歩まる。(歩マレル)

可能の助動詞は「繰り言のみいはる(レル)」「故郷の事のみ思ひ出でる(ラレル)」などと、その動作が自然に起つて止め難い意に用ひられることもある。

らる	ラレル	改めむとすれば改めらる。(改メラレル) 誰にも容易に考へらる。(考ヘラレル)
----	-----	---

三 崇敬の意を表はすもの

文語	口語	用
る	レル	主人は東京に行かる。(行カレル) 殿下は觀艦式に臨まる。(臨マレル)
らる	ラレル	公は書畫を愛せらる。(愛セラレル) 母は未明に起きらる。(起キラレル)

崇敬の助動詞の「る(レル)」「らる(ラレル)」は、可能の助動詞から意味の轉じたものである。

●受身・可能・崇敬の助動詞は、全く同形で三様の意義を表はすものである。

四 使役の意を表はすもの

文語	口語	用
す	セル	生徒に繪畫を習はす。(習ハセル) 子供等に手紙を書かす。(書カセル)

さす	サセル	下婢に塵を捨てさす。(捨テサセル)
しむ	シメル	病人に藥を飲ましむ。(飲マシメル)
		弟に雀を捕へさす。(捕ヘサセル)
		人をして彼に諭さしむ。(諭サシメル)

●使役の助動詞は崇敬の助動詞としても轉用されるが、これは後に説く。

五 時の意を表はすもの

文語	口語	用	例
つ	○		心はちぢにかき亂れつ。 計らず友に出で遇ひつ。
ぬ	○		櫻も桃も咲き初めぬ。 さめざめと泣き出でぬ。
たり	タ		夜も漸く明けたり。(明ケタ)
り	○		頻りに眠を催したり。(催シタ)
			友と共に學校より歸れり。 さまざまの人物を描けり。

「つ」は、今文には餘り用ひられない。

き	けり	む
○	○	ヨウ
		又も來て見む。(見ヨウ)
		午後は風吹かむ。(吹カウ)
		彼は頗る智略に富みけり。 花も散り果てけり。
		昔一人の翁ありき。 少女は泣いて語りき。

「む」は音便で「ん」と發音するから、「ん」とも書く。

○文語の「つ」「ぬ」「たり」「り」は現在完了の時を表はし、「き」「けり」は過去の時を表はすものであるが、口語では、ただ文語の「たり」から轉訛した「タ」の一語のみが、過去を表はす助動詞として用ひられるだけである。又、文語の「む」は未來の時を表はすものであるが、口語では、それが轉訛して「ウ」「ヨウ」となつて、兩様に用ひられる。

六 否認の意を表はすもの

文語	口語	用	例
ず	ヌ ナイ		花咲かず。(咲カヌ・咲カナイ) 山の姿も見えず。(見エヌ・見エナイ)
じ	〇		誰も誠とは思はじ。 未だ遠くは行かじ。

○「ず(ヌ・ナイ)」は断定して否認する意を表はし、「じ」は遲疑して否認する意を表はすもので、いづれも事を否定する意の助動詞である。

七 指定の意を表はすもの

文語	口語	用	例
なり	〇		美しき心なり。 花の散るなり。
たり	ダ		父は官吏たり。(官吏だ) 彼は稀なる名匠たり。(名匠だ)

口語では、指定の「なり」「たり」の代りに、「デアル」又は「ダ」といふ語を用ひる。右の「ダ」は「デアル」の「デ」が約つて「ダ」となり、「ル」が省かれたのである。

「ヌ」は關西語に、「ナイ」は關東語に多く用ひられる。

○指定の助動詞の「たり」と、時の助動詞の「たり」とは同形であるが、意義は別である。但し、指定の「たり」は名詞に付き、時の「たり」は動詞に附く。

●形容動詞の「遙かなり」「詳かなり」「平然たり」「確乎たり」などの「なり」「たり」も、この指定の助動詞の「なり」「たり」と同形であつて、誤認し易いから注意を要する。

八 想像の意を表はすもの

文語	口語	用	例
らむ	〇		人も知るらむ。 花や咲くらむ。
けむ	〇		何處に隠れけむ。 いつの頃にてありけむ。

「らむ」「けむ」は、今文には餘り用ひられない。
「らむ」「けむ」は音便で「らん」「けん」と發音するから、「らん」「けん」とも書く。

べし	○	雨も霽るべし。 水も腐るべし。
まじ	マイ	約束は破るまじ。(破ルマイ) 難き事も有るまじ。(有ルマイ)

○「らむ」は現在の想像を表はし、「けむ」は過去の想像を表はし、「べし」は指定の想像を表はし、「まじ(マイ)」は否認の想像を表はすもので、いづれも事を断定せず、心に推量する意の助動詞である。

○「べし」は、又、「道路は左側を行くべし」、「明朝九時に出頭すべし」などと、命令の意に轉用されることがあり、「力山をも抜くべし」、「忠臣の鑑といふべし」などと、可能の意に轉用されることもある。

九 推定の意を表はすもの

口語では、想像の「べし」の代りに「デアラウ」又は「ダラウ」といふ語を用ひる。右の「ダラウ」の「ダ」は「デアラウ」の「デ」「ア」が約つたものである。

文語	口語	用	例
らし	ラシイ		人の居るらし。(居ルラシイ) 雨も止むらし。(止ムラシイ)

一〇 希望の意を表はすもの

文語	口語	用	例
たし	タイ		早く歸りたし。(歸リタイ) 行きて見たし。(見タイ)

一一 比況の意を表はすもの

文語	口語	用	例
ごとし	○		手に取るごとし。光陰は矢のごとし。 火の飛ぶがごとし。水の清きがごとし。

○「ごとし」は、中に「の」又は「が」を挟んで、上の名詞・動詞・形容詞などに接することが多い。

口語では、比況の「ごとし」の代りに、「ヤウテアル」又は「ヤウダ」といふ語を用ひる。又、口語では、右の「ヤウテアル」「ヤウダ」は、事を推量する意にも轉用される。子供等ハ眠ツタヤウデアル。花モ見ゴロハ過ギタヤウダ。

◎左の文中から助動詞を摘出して見よ。

- 一 殿下は鹽原に御避暑遊ばされた。(口)
- 二 君の志望は容易に達せられまい。(口)
- 三 過ぎたことは、どんなに悔いても取り返されぬものだ。(口)
- 四 心配した事が無事に済むと云はれて、ほつと安心した。(口)
- 五 起きて見つ、寝て見つ、大波に揺らるるとき思にて、一夜を明しき。(文)
- 六 家富めりとして、誇るべき事にあらずと諭されぬ。(文)
- 七 知らずとて、打ち捨て置くべき事にもあらずと思はる。(文)
- 八 己が堪へらるる事なりとて、人に強ひて行はしめらるべきものにあらず。(文)
- 九 己自ら人に先んじて實行せば、何事も人に勵行せしむることを得む。(文)

- 一〇 人に笑はれむが恥かしとて、門を閉ぢさせ、家の奥深く隠れ居たるに、遂に見出されけり。(文)

九 助 詞

- 一 「犬が猫を追ふ。」(口語)の「が」「を」などは、上の語に添はつて、これを助けて下の語との關係を示す語である。
 - 二 「肉のみ食ふとも胃を害ふこと無きか。」(文語)の「のみ」「とも」「か」などは、上の語に附いて或意義を添へて、他語との關係をいよいよ明かにする語である。
- 右のやうに、上の語に添はつて、これを助けて他語との關係を表はす語を助詞といふ。
- 普通に用ひられる主なる助詞を、その表はす意義によつ

助詞は、又、てにまはともいふ。

て分類し、口語と文語とを對比して、左にこれを例示しよう。表中の平假名は文語の助詞を表はし、片假名はこれに對する口語の助詞を表はす。そして、文語と口語と同じ助詞のものは、大方、口語の用例を省略した。

一 他語との關係を表はすもの

文語	口語	用例
の	ノ	世の中。梅の花。多くの人。 風の吹く日。夢のごとき話。
が	ガ	君が代。劍が峯。古人が云ふ。實無きが多し。 考へて見るがよし。眠るがごとし。
つ	ツ	天つ神。中つ國。沖つ波。 上つ瀬。暮つ方。
を	ヲ	花を折る。人を訪ふ。路を行く。 多くを取る。散るを歎く。

口語では、左例のやうな場合にも「ノ」を用ひる。
固イノハヨクナイ。
行キタイノハ山山ダ。
帽子ノ靴ノトイロイロ買ヒタガル。
姿ガ映ルノデアル。
「つ」は、今文には殆ど用ひられない。

に	と	へ	より	から	まで
ニ	ト	ヘ	ヨリ	カラ	マデ
車に乗る。人に劣る。花に風。 泣きに泣く。山へ登ル。水へ浮カス。	妹と遊ぶ。人と樂しむ。月と花。雪と散る。 來ると思ふ。ありとある物。	前へ進め。左へ向く。 都へ上る。東へ下る。	遠方より來る。雪より白し。 命より惜し。友カラ贈ラレタ。	心から思ふ。我から招く罪。 明日からは誰をか頼まむ。	頂上まで登る。心まで腐る。 雪と見るまで花を散り布く。

口語でも「海ヨリ深イ」丈ガ兄ヨリ高イ」などと、比較の場合には「ヨリ」を用ひる。

○文語では、「に」は位置を示し、「へ」は方向を示す助詞であつて、「前に向く」「馬へ乗る」などと書くのは誤であるが、口語では、位置を示すにも、「川へ落ちル」「車へ乗ル」など

といふことが多い。但し、文語でも、「京に上る」「京へ上る」などと、位置にも方向にもいはれるものは、いづれでもよい。

二 種類の意義を添へるもの

文語	口語	用	例
は	ハ	朝は寒し。見るは樂し。善きは善し。弟には勝る。友とは思はず。茶をば飲む。	「は」が「を」の下に添はる時は、音便で「ば」となる。
も	モ	葉も美し。歸るもあり。嬉しくもなし。犬にも劣る。師とも仰ぐ。山よりも高し。	口語では、文語の「のみ」の意に當る助詞に、なほ「キリ」「シカ」などがある。但し「シカ」を用ひる場合は、下を否認にいふ。
のみ	ダノミ	我のみ知る。心にのみ思ふ。思フダケダ。見ルダケデヨイ。	見ルキリダ。 三ツギリダ。
ばかり	バカリ	水ばかりを吞む。思ふばかりぞ。人ニバカリタヨルノハ宜シクナイ。	五ツシカナイ。 詫ビルシカ仕方ガナイ。
だに	デモ	水だに飲まれず。一人だになし。一步デモ退カナイ。一字デモ讀メナイ。	

すら	スラ	草木すら情あり。治世にてすら然り。子供ニサへ出來ル。本人サへ知ラナイ。
さへ	サヘ	風さへ吹く。都にてさへ珍し。君サへ疑フノカ。死ナウトサへ思ツタ。
し	シ	時しもあれ。いつしかと待たる。今朝シ方。果テシガナイ。
ぞ	ゾ	花ぞ散るらむ。早くぞ過ぐる。慎むべき事ぞ。マダ足リナイゾ。
こそ	コソ	年こそ若けれ。人にこそよれ。ソレデコソ男ダ。ソレコソ大變ナ事ダ。

○「だに(デモ)」「すら(スラ)」は輕きを擧げて重きを言外に思はしめる意の助詞であり、「さへ(サヘ)」は、在るが上に更に添ひ加はる意の助詞である。但し口語の「サヘ」は、「すら(スラ)」の意にも用ひられる。

○「ぞ(ゾ)」は上の語を特に取り立てて強めて示す意の助詞

口語では、文語の「さへ」の意に當る助詞に「マデ」がある。

君マデ疑フノカ。
死ナウトマデ思ツタ。

であり、「こそ(こそ)」は、なほ一層強めて示す意の助詞である。

三 語句を接続する用をなすもの

文語	口語	用	例
ぼ	ト カラ ノデ	日暮るれば寒し。快くば起きよ。 雨が降ルト暖イ。遠イト聞エナイ。 價高ければ買はず。價が高イカラ買ハナイ。 雨降れば中止せり。雨が降ルノデ中止シタ。	呼べト答へず。美しけれど光なし。 呼ブケレド聞エナイ。苦シイケレド忍ブ。 視れども見えず。悲しけれども泣かず。 働クケレドモ貧シイ。幼イケレドモ力が強イ。 悔ゆとも及ばじ。苦しくとも忍べ。 人が笑フトモ怒ルナ。價が高クテモヨイ。
ども	ケレドモ		
とも	トモ テモ		
ど	ケレド		
て	テ		

口語の「ト」は、上の語が多く假定の場合に用ひられ、「カラ」「ノデ」は、上の語が確定の場合に用ひられる。口語でも、上の語が假定の場合には、「春ニナレバ花ガ咲ク」「讀メバ讀マレル」などと、「バ」を用ひることが多い。

又、口語では、假定の場合に「ナラ」、確定の場合に「タラ」を用ひることがある。これ等は、文語の「ならば」「たらば」から轉訛したものである。

行クナラ一緒ニ行カウ。
聞カセタラ得心シタ。

文語	口語	用	例
で	ナイデ ズニ	行かて歸る。誰も知らであり。 問ハナイデ知レル。食ハズニ寝ル。	
して	テ	赤くして美なり。細くして大なり。 美シクテ光ガアル。大キクテ長イ。	
にて	デ	病氣にて休む。支那にても忌む。 門前デ待ツ。外國デモ厭フ。	
にして	デ	堅牢にして大なり。賢にして徳あり。 柔カデウマイ。仁俠デ人望ガアル。	
つつ	ナガラ	見つつ書く。笑ひつつ語る。 泣キナガラ眠ル。話シナガラ行ク。	
が	ガ	雨は止みしが、風烈し。腹立ちしが、色に出さず。 聲ハ聞エルガ、姿ハ見えヌ。探シタガ、見當ラス。	
に	ノニ	友を訪ねしに、不在なりき。 日ガ暮レタノニ、マダ歸ツテ来ナイ。	
を	モノヲ	吾はしか思ふを、君はいかに。 泣カセナイデモヨイモノヲ、無闇ニ叱ルカラダ。	

「テモ」は「死ンテモ忘レナイ」「吞ンテモ吞マンテモヨイ」などと、音便で「テモ」となる。

「テ」が「デ」となるのも音便である。

口語には、左例のやうに用ひられる「シテ」がある。

親子シテ働ク。
若イ時カラシテ人ニ勝ンテ居タ。

口語では、接続の用をなすものに、なほ「ヤ」「ヤラ」「シ」「タリ」「トカ」など、注意すべきものがある。

松ヤ、桐ヤ、サマザマノ樹ヲ植エタ。
泣クヤラ、笑フヤラ、大騒ダ。
風ハ涼シイシ、見晴シハヨイシ、結構ナ處ダ。
今年ハ雨ガ降ツタリ、風

四 疑問の意を表はすもの

文語	用	例
や	カヤ	夜や明けたる。夢をや見る。 君は母ありや。オ前ハ兄ガアルカ。
か	カ	誰かいふ。何をか歎く。 いづこへ行くか。ドコニ居ルカ。

四八

ガ吹イタリシテ、悪イ年
ダ。
煮テ食フトカ、焼イテ食
フトカシナケレバナラナ
イ。

五 命令の意を表はすもの

文語	用	例
よ	ヨ	速に答へよ。力を添へよ。 退いて熟慮せよ。
な	ナ	勉めて怠るな。罪を犯すな。 人に知らすな。人ニ教ヘルナ。

六 感動の意を表はすもの

文語	用	例
や	ヤ	美しき花や。いひがひなしや。 忝き御志なりや。早ク行カウヤ。
よ	ヨ	尊き御心よ。たよりなき心細さよ。 元祿の頃かとよ。後カラ行クヨ。
は	ハ	何かはせむ。誠におはしたるは。 さる事あらむやは。澤山有ルハ。
も	モ	大君はいとも畏し。行くへ知らずも。 楽しくもあるかな。一人カモ知レナイ。
な	ナ	汝は臆したりな。我も老いけりな。 いとど悲しな。カナリ重イナ。
かな	カナ	盛なるかな。楽しきかな。 美しき心かな。賑ヤカナ事カナ。

○右に示したやうに、助詞の中には同形で意義の異なるものが多いから、特に注意してその意義を誤らないやうに

口語では、感動の意を表はすものに、なほ「ネ」「サ」「テ」「エ」などがある。
雨が降り出シタネ。
六時ニ起キルサ。
ソレモ善カラウテ。
歸ツテモイイノカエ。

しなければならぬ。

○以上は、ただ主要の助詞について述べたもので、なほ口語には、他にも種類の助詞が用ひられるから、それ等は類推して知れ。

○助詞は、又、幾つも重ねて用ひられることが多い。

私には君よりも重い責任がある。(口語)

子供でさへも出来る事だ。(口語)

心をば鎮めて我が行を願みよや。(文語)

人にして鳥獸にだに如かざるものあり。(文語)

右のやうに用ひられた助詞は、それぞれの助詞の意義を重ねたものと知れ。

○又、文語では、「に」「と」「を」等の助詞の下に、「て」「して」を添

へて用ひることが多い。

木にて造る。

困難とてなし。

人にして人にあらず。

子として有るまじきことなり。

義經をして平氏を討たしむ。

右のやうに用ひられた「にて」「とて」「にして」「として」「を」して「等は、一の熟合した助詞と見なしてもよい。

○左の文中から助詞を摘出して見よ。

- 一 君は弟を連れて何處へ行かれるか。(口)
- 二 花でも見ながら郊外を散歩して来ようと思ふ。(口)
- 三 體は小さくても力は強いぞと威張つては見るが、丈の高

- 四 他人の私でさへ涙がこぼれるものを、本人の身になつたならば、どんなにか悲しいことであらう。(口)
- 五 曇りたるだに寒さを、風さへ加はりて堪ふべくもなし。(文)
- 六 人もや聞くと、足音にさへ氣をおきて、息を殺して忍び寄り。(文)
- 七 人として慈悲の心なくば、位高く家富めりとも、鳥獸にだに及かずといふべし。(文)
- 八 彼は稀なる勉強家なりしが、惜しいかな、短命にて世を去りき。(文)
- 九 日は暮れたるに、はてしもなき野は行けども盡きず、宿るべき家とてなし。(文)
- 一〇 兄弟とこそいへ、彼等の性質は雪と炭のごとく、著しく相違せるにあらずや。(文)

◎左の口語を文語に改めて見よ。

- 一 雨が降ると、途は泥海のやうになつて歩かれない。
- 二 鐵砲は、何時の頃から我が國に傳はつたものであらうか。
- 三 名譽ばかりは、金錢でも買はれない貴いものだ。
- 四 彼は甚だ頑愚な少年で、屢、訓誡するけれども、一向に改心しない。
- 五 室内に居てさへ、身の毛がよだつほどの嚴しい寒さだ。
- 六 用意は整うたのに、海が荒れるので出帆せられない。
- 七 いかにか叱られても、知らない事は答へられない。
- 八 猿でも木から落ちることがあると誠められた。
- 九 悔んでもかひないことと知りながらも、なほあきらめられないのが人情だ。
- 一〇 一人で旅行する時は寂しいばかりで、面白いことは少しもない。

一〇 接續詞

- 一 「山又山」「書を読み且つ字を習ふ」(文語)の「又」「且つ」などは、二の語句を接續させる語である。
 - 二 「雨が烈しく降る。しかし風は静かだ」(口語)の「しかし」などは、二の文を接續させる語である。
- 右のやうに、二の語句又は文を接續させるために、その間に挟んで用ひられる語を接續詞といふ。
- 接續詞の中には、まます上の語句に附屬して表はれるものもある。これは候文體に多く用ひられる。
- 御相談致したく候間、明朝御來車下されたく候。

不順の時候に候處、御機嫌いかがに候や。

○接續詞は、主に左の三種から成る。

- 一 普通のもの
 - また 及び 且つ 即ち 但し
 - 二 種類の熟語から成るもの
 - よりて されば 故に 況や 或は 然れども 随つて 抑も さる程に 此に於て 併しながら
 - 三 二の接續詞を重ねたもの
 - 且つ又 抑も亦 随つて又 況や又
- 右はその一斑を示したのに過ぎない。他は推して知れ。
- 接續詞の中には、副詞と同じ形のものがある。
- 明朝又此處で會はう。(口語)

口語にのみ用ひられる接續詞には、「さうして」「そして」「それに」「それが」「それだのに」「だから」「それとも」「それでも」「それなら」「さうすると」「さうしたら」「そこで」ところが「など」数多ある。

それは或は詐偽かも知れない。(口語)
不幸とは且つ知りながら、なほ思ひ惑へり。(文語)
これ等は接續詞と同形ではあるが、副詞として用ひられたものと知れ。

◎左の文中から接續詞を摘出して見よ。

- 一 雨が降り出した。しかし、大降りにはなるまい。(口)
- 二 敵は小勢だ、併しながら、侮りがたい。(口)
- 三 怪賊は捕へられた。そこで、一同が大いに安堵した。(口)
- 四 霞か、雲か、はた、雪か。(文)
- 五 知りて行ひしか、抑も亦、知らずしてか。(文)
- 六 場内極めて狭し、されば、何人も容易に入場することを許されず。(文)

- 七 不都合少からず候條、自今十分に注意せらるべく候。(文)
- 八 深呼吸、或は冷水摩擦を行ひ、而して血液の循環をよくすべし。(文)

一一 感動詞

○一 「ああ嬉しい。」(口語)の「ああ」は、心に感動して發する語である。

二 「すは火事よ。」「あはや水中に溺れむとす。」(文語)などの「すは」「あはや」なども感動の語である。

右のやうに、心に感動して發する語を感動詞といふ。

○助詞にも感動の意を表はすものがあるけれども、ここにいふ感動詞は、獨立した一語として感歎の意を表すもの

である。(四九頁参照)

○文語に多く用ひられる感動詞は、主に左の十數語である。他は推して知れ。

ああ あな あはれ あはや すは すはや
いで いざ いでや いざや おお

◎左の文中から感動詞を摘出して見よ。

- 一 おや、大層早かつたね。(口)
- 二 あれ、あそこに猫が寝てゐるよ。(口)
- 三 ええ、残念な事をした。(口)
- 四 嗚呼、盛なるかな。(文)
- 五 しづかに眠れ。やよ、子供。(文)
- 六 あな、あさましの世や。(文)

口語に多く用ひられる感動詞には、「あ」「あら」「いや」「おや」「さあ」「そら」「まあ」「やあ」など數多ある。

七 いでや、何ばかりの事かあらむ。いざ、諸共に進撃せむ。(文)

一一一 動詞の活用

○動詞はその語尾が活用するものであることは、前に述べた通りであるが、(五頁参照)動詞によつてその活用がまちまちである。今これを左に説明しよう。

○一 四段活用

	ア	段	イ	段	ウ	段	エ	段	オ	段
書	か		き		く		け		(こ)	
指	さ		し		す		せ		(そ)	

●表中の(こ)(そ)のやうに、括弧を附したものは、活用のないことを示すものである。以下もこれに準じて知れ。

右のやうに、語尾が五十音圖中の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に活用するものを四段活用の動詞といふ。

○この活用は、文語の場合でも、口語の場合でも、同一である。

◎左の動詞を活用させて見よ。

- 遊ぶ 歩む 走る 争ふ 歎く 勇む
- 進む 誘ふ 勝つ 待つ 讀む 習ふ

〇二 上一段活用 下一段活用

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
〔見〕	(ま)	み-み-み れ	(む)	(め)	(も)

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
〔蹴〕	(か)	(き)	(く)	け-け-け れ	(こ)

●「見」「蹴」などは一音で、語根と語尾とを分ち難いから、特に括弧を附して〔見〕〔蹴〕と記し、漢字から読み續けるのであることを示した。以下もこれに準じて知れ。

右の前例のやうに、語尾が五十音圖中の「イ」段と、なほその「エ」段に「る」「れ」の添はつて活用するものを上一段活用の動詞といひ、後例のやうに、「エ」段と、なほその「エ」段に「る」「れ」の添はつて活用するものを下一段活用の動詞といふ。いづれも同じく一段の活用ではあるが、一は五十音圖中の上方の一段に活用し、一はその下方の一段に活

用するものであるから、かやうに區別したのである。但し
 下一段活用の動詞は、右の「蹴る」の一語だけである。
 ○この二の活用も、文語の場合でも、口語の場合でも、同一で
 ある。

◎左の動詞を活用させて見よ。

見る 着る 干る 似る 鑄る 率ゐる

○三 上二段活用下二段活用

起	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
(か)		き	く-く-く れる	(け)	(こ)

捨	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
(た)		(ち)	つ-つ-つ れる	て	(と)

右の前例のやうに、語尾が五十音圖中の「イ」「ウ」の二段と、
 なほその「ウ」段に「る」「れ」の添はつて活用するものを上
 二段活用の動詞といひ、後例のやうに、「ウ」「エ」の二段と、
 なほその「ウ」段に「る」「れ」の添はつて活用するものを下
 二段活用の動詞といふ。これもまた、五十音圖中の上方の
 二段に活用するものと、下方の二段に活用するものとの
 よつて區別したのである。

○この二の活用は、文語の場合と口語の場合とで、その活用
 を異にする。文語の場合は右の通りであるが、口語の場合

は左例のやうに活用して、上一段活用・下一段活用と同一になる。

	ア	段
起	(か)	
	イ	段
き=き=き きれ		
	ウ	段
(く)		
	エ	段
(け)		
	オ	段
(こ)		

	ア	段
捨	(た)	
	イ	段
(ち)		
	ウ	段
(つ)		
	エ	段
て=て=て れ		
	オ	段
(と)		

◎左の動詞を文語の場合と口語の場合とに分つて活用させて見よ。

- 過ぐ 閉づ 恥づ 悔ゆ 延ぶ 落つ

- 分く 忘る 流る 留る 治む 與ふ

○四 加行變格活用佐行變格活用

	ア	段
[來]	(か)	
	イ	段
き		
	ウ	段
く=く=く れる		
	エ	段
(け)		
	オ	段
こ		

	ア	段
[爲]	(さ)	
	イ	段
し		
	ウ	段
す=す=す すれ		
	エ	段
せ		
	オ	段
(そ)		

右の前例のやうに、語尾が五十音圖中の「イ」「ウ」「オ」の三段と、なほその「ウ」段に「る」「れ」の添はつて活用するものは、ただこの加行の「來」の一語だけであり、又、後例のやう

に、「イ」「ウ」「エ」の三段となほその「ウ」段に「る」「れ」の添はつて活用するもので、普通に用ひられるものは、この佐行の「爲」の一語だけである。これ等の特殊の活用をなす少數の動詞を變格の活用として、前者を加行變格活用の動詞といひ、後者を佐行變格活用の動詞といふ。

○この二の活用は、文語の場合と口語の場合とで、いささか異なつて、文語では「く」「す」といひ切るべき場合を、口語では「くる」「する」といひ切るものである。

朝早くく。(文語) 朝早くくる。(口語)

庭掃除をす。(文語) 庭掃除をする。(口語)

○佐行變格活用の本來の動詞で、普通に用ひられるものは「す」の一語だけであるが、名詞が「す」と合して、「罪す」「論

佐行變格活用の動詞としては、上の「す」の外に、なほ「おはす」といふ語がある。

「きたる(來)」「なす(爲)」といふ時は四段活用である。

ず」「進歩す」「發達す」などと、熟語の動詞となつたものは、すべてこの活用に屬するものである。

●「重んず」「輕んず」「疎んず」なども、「重みす」「輕みす」「疎みす」の「み」を音便で「ん」に呼びかへたまでで、名詞に「す」が添はつて熟語の動詞となつたものであるから、この活用に屬する。

○又、左例のやうに、「す」の上に副詞の添はつたものも、この活用に屬する熟語の動詞と見なしてよい。

審かにす 明かにす 能くす 辱くす
全うす 潔うす 高うす 諳んず 先んず

●「全うす」「潔うす」「高うす」「諳んず」「先んず」などは、「全くす」「潔くす」「高くす」の「く」を「う」に、又、「諳に

「罪す」「害す」「表す」などは、「罪せむ」「害せず」「表せしむ」などといふべきで、左例のやうに用ひるのは誤である。
盗みするものは罪さむ。
感情を害さず。
祝意を表さしむ。

す「先にす」の「に」を「ん」に、音便で呼びかへたものである。

◎左の動詞を文語の場合と口語の場合とに分つて活用させて見よ。

- 競争す 議論す 熟考す 信用す 勉強す
- 辯ず 祝す 發す 奴隷視す 田舎化す

○五 奈行變格活用

死	ア	段	イ	段	ウ	段	エ	段	オ	段
な										
に										
ぬ=ぬ=ぬ れる										
ね										
(の)										

右のやうに、語尾が五十音圖中の四段となほその「ウ」段

「死ぬ」といふ動詞は、文語の場合でも、「死な・死に・死ぬ・死ぬ」と、四段活用の動詞として用ひられることもある。

に「る」「れ」の添はつて活用するものは、この奈行の「死ぬ」の外に、同行の「往ぬ」の一語があるだけである。これ等も、また、變格の活用として、**奈行變格活用**の動詞といふ。

○この活用は、文語の場合と口語の場合とで、その活用を異にする。文語の場合は右の通りであるが、口語の場合は左例のやうに活用して、四段活用と同一になる。

死	ア	段	イ	段	ウ	段	エ	段	オ	段
な										
に										
ぬ										
ね										
(の)										

○六 良行變格活用

有	ア	段	イ	段	ウ	段	エ	段	オ	段
ら										
り										
る										
れ										
(る)										

右のやうに、語尾が五十音圖中の四段に活用するけれど

も、四段活用の動詞のやうに「ウ」段でいひ切らないで、「イ」段でいひ切るものは、普通には、この「有り」の外に、同行の「居り」が同様に活用するだけである。それ故、これ等も、また、變格の活用として、**良行變格活用の動詞**といふ。

○この活用は、文語の場合には右の通りであるが、口語の場合には、四段活用と同一になつて、文語では「有り」「居り」といひ切るべき場合に、口語では「有る」「居る」といはれるものである。

三人の子あり。(文語) 三人の子がある。(口語)
ただ一人居り。(文語) ただ一人居る。(口語)

○良行變格活用の本來の動詞で、普通に用ひられるものは、「有り」「居り」の二語だけであるが、「有り」が形容詞や副詞

「居り」といふ動詞は、文語の場合でも、「居ら・居り・居る・居れ」と、四段活用の動詞として用ひられることもある。

良行變格活用の動詞としては、上の「有り」「居り」の外に、なほ「侍り」といふ語がある。

と熟合して成つた「善かり」「悪しかり」「美麗なり」「爛漫たり」などのやうな形容動詞は、すべてこの活用に屬するものである。(七二頁参照)

◎左の形容動詞を活用させて見よ。

樂しかり 悲しかり 黒かり 清かり
優美なり 長閑なり 巍然たり 斷乎たり

○以上述べた九類の活用の中、上一段・下一段・加行變格・佐行變格・奈行變格・良行變格の六の活用に屬する動詞は、その數も少く、僅に左の數語に過ぎないから、悉くこれを暗記するがよい。

上一段 著る 煮る 似る 干る 見る (試みる・顧みる・鑑みる・惟みる)

「試みる」といふ動詞は「試み・試む・試むる・試むれ」と、上二段活用の動詞としても用ひられる。

射る 鑄る 居る 率ゐる

下一段 蹴る

加行變格 來

佐行變格 爲この外、名詞や副詞が「ず」と兼合して動詞となつたものはすべてこの活用に屬するものと知れ。

奈行變格 死ぬ 往ぬ

良行變格 有り 居りこの外、形容動詞はすべてこの活用に屬するものと知れ。

●加行變格・佐行變格・奈行變格・良行變格は、略して加變・佐變・奈變・良變ともいふ。

○四段・上二段・下二段の三の活用に屬する動詞は、その數も多く、随つて互に紛れ易いものであるから、これを識別するには、左の便法によるのがよい。

一 「書かむ」「讀まむ」「習はむ」などのやうに、「む」を添へ

「用ふ」といふ動詞は「用ゐる・用ゐれ」と、上一段活用の動詞としても用ひられる。

「む」の代りに「ず」を添へて見てもよい。

る時に、五十音圖中の「ア」段に活用するものは、四段活用の動詞である。

二 「落ちむ」「生きむ」「朽ちむ」などのやうに、「む」を添へる時に、五十音圖中の「イ」段に活用するものは、上二段活用の動詞である。

三 「考へむ」「集めむ」「消えむ」などのやうに、「む」を添へる時に、五十音圖中の「エ」段に活用するものは、下二段活用の動詞である。

◎右の方法によつて、左の動詞の活用を類別して見よ。

越ゆ	籠る	懸く	起く	泣く	亂る
富む	照す	流る	飲む	留む	榮ゆ
衰ふ	戒む	見ゆ	出づ	語る	恥づ

悔ゆ 堪ふ

一三 動詞の語形 附、動詞の音便

○動詞はその語尾が活用して種種の語形に變るものであることは、前章に述べた通りである。これ等の語形をその用ひ方によつて、未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形と名づける。

- 一 「雨降らば中止せむ。」「死なば苦を忘るべし。」(以上文語)
- 二 の「降ら」「死な」などのやうに、助詞の「ば」に續けて、假に定めていふ意を表はすに用ひる語形を未然形といふ。

連用形は「花咲き鳥鳴く」「政亂れ國衰ふ」などと、下の文にいひ續ける時にも用ひられる。

二 「花が咲き揃ふ。」(口語)「心亂れ易し。」(文語)の「咲き」「亂

れ」などのやうに、下の動詞・形容詞などの用言に續けるに用ひる語形を連用形といふ。

三 「水が流れる。」(口語)「霜天に滿つ。」(文語)の「流れる」「滿

つ」などのやうに、文をそのまま結び止めるに用ひる語形を終止形といふ。この語形を動詞の本體とする。

四 「賞を受ける人が多い。」(口語)「雲の靡く彼方を見よ。」

(文語)の「受ける」「靡く」などのやうに、下の名詞・代名詞などの體言に續けるに用ひる語形を連體形といふ。

五 「風が吹けば寒い。」(口語)「馬を馳すれど追ひつかず。」

(文語)の「吹け」「馳すれ」などのやうに、助詞の「ば」又は「ど」に續けて、確と定めていふ意を表はすに用ひる語形を已然形といふ。

六 「早く行け。」(口語)「速に答へよ。」(文語)の「行け」「答へ」などのやうに、動詞そのままか、又は助詞の「よ」をこれに添へて、命令の意を表はすに用ひる語形を命令形といふ。

●以上の六の語形の名稱は、その主なる用ひ方について、便宜上名づけたまでであつて、この名稱の意味にのみ用ひられるのではない。

○以上述べた未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形の六の語形を、種種の動詞について例示すれば、左表のやう

口語では、その已然形が、文語の未然形のやうに、助詞の「ば」に續けて假に定めていふ意を表はすに用ひられる。
泣けば笑はれよう。
教へれば覚えよう。

になる。但し、表中の平假名は文語の活用を示し、片假名は口語の活用を示す。

段一上		段		四		口語	文語			
段二上	段一上	變 奈	變 良	段 四						
〔起〕		〔見〕		〔死〕		〔有〕		〔讀〕		
オキ	おき	ミ	み	シナ	しな	アラ	あら	ヨマ	よま	未然形
オキ	おき	ミ	み	シニ	しに	アリ	あり	ヨミ	よみ	連用形
オキル	おく	ミル	みる	シヌ	しぬ	アル	あり	ヨム	よむ	終止形
オキル	おくる	ミル	みる	シヌ	しぬる	アル	ある	ヨム	よむ	連體形
オキレ	おくれ	ミレ	みれ	シネ	しぬれ	アレ	あれ	ヨメ	よめ	已然形
オキ	おき	ミ	み	シネ	しね	アレ	あれ	ヨメ	よめ	命令形

變佐		變加		段一下		段一下	
變佐		變加		段二下		段一下	
〔爲〕		〔來〕		〔越〕		〔蹴〕	
セ(シ)	せ	コ	こ	コエ	こえ	ケ	け
シ	し	キ	き	コエ	こえ	ケ	け
スル	す	クル	く	コエル	こゆる	ケル	ける
スル	する	クル	くる	コエル	こゆる	ケル	ける
スレ	すれ	クレ	くれ	コエレ	こゆれ	ケレ	けれ
セ	せ	コ	こ	コエ	こえ	ケ	け

●表中の括弧内の漢字は、下の假名書きの動詞を示す當字である。又、この表には、各活用について一語づつだけを例示したに過ぎないから、試みに種類の動詞をこれに當てはめて見よ。

○右のやうに、動詞の活用はまちまちで、その語形の變化に三のものもあり、四のものもあり、五のものもあり、六のもの

文語の「綻ぶ」「恥づ」「衰ふ」などの連體形は、「綻ぶる」「恥づる」「衰ふる」である。これを左例のやうに用ひるのは誤である。
 花の綻ぶ(る)こと早し。
 心に恥づ(る)人なし。
 身衰ふ(る)時は病をかもし易し。
 口語では、佐變の動詞の未然形は「セ」とも「シ」とも活用する。

感服セヌ。(關西語)
 通用シナイ。(關東語)
 勉強シヨウ。(關東語)

のもあつて一定しないから、これを統一して同形式に據らしめるには、是非とも前表のやうに、同一の語形を以て二三の用を兼ねしめなければならぬものである。
 ○右の表のやうに、語形の變化がまちまちである各の動詞について、その未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形の六の語形を知らうとするには、次の便法によるのがよい。
 まづ、左例のやうに「む」「たり」「時」「ど」「よ」と記しておいて、その語形の變化を知らうとする動詞から、これ等の語にひひ續けて見るのである。この方法による時は、いかなる動詞も、直にその六の語形を知ることが出来る。但し、動詞によつては、「書け」「飲め」「死ね」などのやうに、「よ」を添

へないでも命令を表はすものがある。と知れ。

〔讀〕		〔見〕	
よま	む	み	む
よみ	たり	み	たり
よむ	○	みる	○
よむ	時	みる	時
よめ	ど	みれ	ど
よめ	(よ)	み	よ
命令形	已然形	命令形	已然形
	連體形		連體形
	終止形		終止形

- ◎左の文中の動詞が何形の語形に表はれて居るかを答へよ。
- 一 鶯の啼く聲に目を覺した。(口)
 - 二 勤める人は富み、怠る人は貧しくなるものと知れ。(口)
 - 三 恩を受けば、必ず報いよ。(文)
 - 四 木まづ朽ちて、蟲これに生ずるものなり。(文)

- 五 財貨は盡くることあれども、芳名は朽つることなし。(文)
 - 六 大地の震ふ間もなく、家は覆り、人は逃げ惑ふ。(文)
 - 七 清く晴れ渡りて、拭ふが如き天空に、明月高く懸りぬ。(文)
- ◎左の文語の動詞を活用させて、その六の語形を挙げよ。
- 考ふ 榮ゆ 寄す 射る 衰ふ 分つ
 受く 捨つ 煮る 笑ふ 祝ふ 流る

◎左の口語の動詞を活用させて、その六の語形を挙げよ。

見える 眺める 教へる 授ける 與へる
 盡さる 報いる 勉める 談ずる 破れる

○口語で、動詞を下の「た」「て」などにいひ續ける場合には、音便で、左例のやうに他の音に呼びかへられるものである。

咲き……咲いた……咲いて

音便で他の音に呼びかへられる時は、その呼びかへられた音に書きかへられるものである。

書き……書いた……書いて
 買ひ……買った……買つた……買つて
 笑ひ……笑うた……笑うて……笑つた……笑つて
 勝ち……勝つた……勝つて
 眠り……眠つた……眠つて
 死に……死んだ……死んで
 休み……休んだ……休んで

「買ふた」「買ふて」「笑ふた」「笑ふて」などと書くのは誤である。

○又、文語でも、右と同様に、動詞を下にいひ続ける場合に、音便で他の音に呼びかへられることがあると知れ。

一四 形容詞の活用とその語形

附、形容詞の音便

○形容詞も、動詞のやうにその語尾が活用するものであることは、已に述べた通りである。(一九頁参照)これ等の語形の變化を、その用ひ方によつて未然形、連用形、終止形、連體形、已然形と名づけ、そして、その終止形を形容詞の本體とする。こゝとは、なほ動詞と同様である。但し、形容詞には命令形はない。又、形容詞でも、動詞のやうに同一の語形が二の語形名に兼ね用ひられる。即ち左表の通りである。表中の平假名は文語の活用を示し、片假名は口語の活用を示す。

	〔近〕	〔淺〕
未然形	ちかく	あさく
連用形	ちかく	あさく
終止形	ちかし	あさし
連體形	ちかき	あさき
已然形	ちかけれ	あさけれ
	○	○
	チカク	アサク
	チカイ	アサイ
	チカイ	アサイ
	チカケレ	アサケレ

口語の形容詞には未然形がない。

	〔涼〕	〔樂〕	〔嬉〕	〔清〕
○	すずしく	たのしく	うれしく	きよく
	スズシク	タノシク	ウレシク	キヨク
	すずしく	たのしく	うれしく	きよしく
	スズシイ	タノシイ	ウレシイ	キヨイ
	すずしき	たのしき	うれしき	きよき
	スズシイ	タノシイ	ウレシイ	キヨイ
	すずしけれ	たのしけれ	うれしけれ	きよけれ
	スズシケレ	タノシケレ	ウレシケレ	キヨケレ

●表中の括弧内の漢字は下の假名書きの形容詞を示す當字である。

○右の表中の「嬉しく」「樂しく」「涼しく」などのやうに、語根に「し」を含む形容詞の終止形は、文語では、語根のまま「嬉し」「樂し」「涼し」などといひ止めるのが普通である。但し、「悪しし」「勇ましし」などと、慣用されるものは、これに従つ

「淺く」「清く」など活用する形容詞を久活の形容詞といひ、「嬉しく」「樂しく」など活用する形容詞を志久活の形容詞といつて、兩者を區別することがある。

ても差使ない。

又、口語の形容詞では、その連用形の語尾の「く」が「有りがたう存じます。」などと、「う」となることもある。

○形容詞の連用形は、形容詞が轉じて副詞となる語形である。

清く澄む。 樂しく遊ぶ。(文語)

近く見える。 悲しく聞える。(口語)

◎左の文中の形容詞を摘出して、それが何形の語形に表はれて居るかを答へよ。

- 一 この花は珍しく香氣が強^い。(口)
- 二 氣性の鋭い人は、動作までが雄雄しく見える。(口)
- 三 肌に通る風も涼しく、心地のよい夕である。(口)

四 位高く身貴き人にも、心の卑しき人無きにあらず。(文)

五 空清く晴れて日は暖けれど、風未だ寒し。(文)

六 周囲は寂しけれど、家も新しく、庭も廣く、湖上も遠く見渡されて、晴晴しき住まひなり。(文)

◎左の文語の形容詞を活用させて、その五の語形を擧げよ。

遠し 暗し 尊し 貧し 悲し 苦し
輕し 白し 黒し 長し 短し

◎左の口語の形容詞を活用させて、その四の語形を擧げよ。

赤い 青い 固い 軟い 辛い 澁い
寂しい 正しい 烈しい 著しい

○口語の形容詞では、文語の形容詞の語尾の「き」が「い」にかはることは、前述の通りであるが、文語の形容詞も、音便でその語尾の「き」が「い」に、「く」が「う」に呼びかへられる

ことがある。

惜しき……………惜しいかな。

難き……………難いかな。

若く……………若うして死す。

厳しく……………厳しう諭しぬ。

○又、文語の形容詞が佐變活用の動詞の「ず」の上に添はつて、熟語の動詞として用ひられる時は、その語尾の「く」が、音便で「う」となるものである。(六七頁六、八頁参照)

全くず……………全うす。

清くず……………清うす。

正しくず……………正しうす。

久しくず……………久しうす。

◎左の文中の音便を指摘し、且つ誤があれば正せ。

- 一 遁げる敵を追ふて、かへつて敵の重圍の中に陥つた。(口)
- 二 知つた人も知らない人も、こぞつて我我の一行を迎へてくれた。(口)
- 三 叔父を訪ふて、委しう物語り、助力を願ふたので、叔父も心よう承諾せられた。(口)
- 四 小成に安んずる人は、何事をも完ふすること能はず。(文)
- 五 月日は逝ひて還らざれば、少年の時に於いて怠らず勉強すべし。(文)
- 六 眼を蔽うて前途をおもんばかれば、萬感胸に迫つて落涙
禁じ難し。(文)
- 七 悲しひかな、彼は辛うじて目的の地に達したれど、遂に蠻人の襲撃に遇ふて斃れたり。(文)

一五 助動詞の活用とその語形

○助動詞は、主として動詞に添はつてその意義を助けるもので、獨立しては表はれないが、又、動詞・形容詞などのやうに、種種の活用をなすものである。(三一頁参照)

○助動詞の活用には、動詞に似たものがあり、形容詞に似たものがあり、或は全く特殊のものがあつて、甚だまちまちである。この語形の變化を未然・連用・終止・連體・已然・命令の六の語形に當てはめて表示すれば、大要は左の通りである。表中の平假名は文語の活用を示し、片假名は口語の活用を示す。

●助動詞も、その終止形を本體とする。

一 動詞に似た活用をなすもの

崇敬		可能				受身						
(仰せ)		(語ら)		(考へ)		(讀ま)		(教へ)		(招か)		
ラレ	られ	レ	れ	ラレ	られ	レ	れ	ラレ	られ	レ	れ	未然形
ラレ	られ	レ	れ	ラレ	られ	レ	れ	ラレ	られ	レ	れ	連用形
ラレル	らる	レル	る	ラレル	らる	レル	る	ラレル	らる	レル	る	終止形
ラレル	らる	レル	る	ラレル	らる	レル	る	ラレル	らる	レル	る	連體形
ラレレ	らるれ	レレ	るれ	ラレレ	らるれ	レレ	るれ	ラレレ	らるれ	レレ	るれ	已然形
○	られ	○	れ	○	○	○	○	ラレ	られ	レ	れ	命令形

受身・可能・崇敬の助動詞は、ほぼ同活用である。

指定	時						使役						
	(善人)		(流れ)	(咲け)	(覚え)	(鳴き)	(眺め)	(問は)	(授け)	(書か)			
ナラ	なら	○	○	タラ	たら	な	て	シメ	しめ	サセ	させ	セ	せ
○	なり	○	○	タリ	たり	に	て	シメ	しめ	サセ	させ	セ	せ
○	なり	けり	り	タ	たり	ぬ	つ	シメル	しむ	サセル	さす	セル	す
○	なる	ける	る	タ	たる	ぬる	つる	シメル	しむる	サセル	さする	セル	する
○	なれ	けれ	れ	○	たれ	ぬれ	つれ	シメレ	しむれ	サセレ	さすれ	セレ	すれ
○	なれ	○	○	○	○	ね	て	シメ	しめ	サセ	させ	セ	せ

文語の「す」「さす」「しむ」の連體形は「する」「さする」「しむる」であるから、左例のやうに用ひるのは誤である。

金錢を持たす(る)事は宜しからず。

習慣を改めさす(る)事は容易ならず。

不當の利を食らしむ(る)事あるべからず。

又、「す」「さす」の連用形は「せ」「させ」であるから、左例のやうに用ひるのは誤である。

苦痛を忍ばしたり。

妹に編ましたる靴下。

敵の様子を見さしたり。

「タ」は「死ンダ」「讀ンダ」「沈ンダ」などと、音便で「ダ」ともなる。

○	たら
○	たり
ダ	たり
○	たる
○	たれ
○	たれ

●表中の上の(一)内の動詞名詞は下の助動詞がこれに添はる有様を示すために添記したものである。以下もこれに準じて知れ。

二 形容詞に似た活用をなすもの

希望 (聞き)	推定 (降る)	想像 (言ふ)	想像 (見る)	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
たく	○	まじくまじく	○	○	○	○	○	○	○
タク	ラシク	○	○	○	○	○	○	○	○
タイ	ラシイ	マイ	○	○	○	○	○	○	○
タイ	ラシイ	○	○	○	○	○	○	○	○
タイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
タケレ	○	○	○	○	○	○	○	○	○

指定の「なり」「たり」については、三六頁の脚註を参照せよ。

想像の「べし」については、三八頁の脚註を参照せよ。「べし」は動詞の「あり」と連り、約つて「べかり」となることが多い。
入るべからず。
行くべかりき。

比況 (動く)

○	ごとく
○	ごとく
ゴトク	ごとく
○	ごとし
○	ごとし
ゴトキ	ごとし
○	○
○	○

三 特殊の活用をなすもの

想像 (知る)	想像 (歸り)	時 (行か)	時 (尋ね)	散り	否認 (見え)	否認 (飲ま)	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
らむ	けむ	○	む	き	じ	ナイ	○	○	○	○	○	○
らむ	けむ	○	む	し	○	ナイ	○	○	○	○	○	○
らめ	けめ	○	め	しか	○	ナケレ	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

「ごとし」には「ごとけれ」といふ活用がなす。
比況の「ごとし」については、三九頁の脚註を参照せよ。

「ず」は動詞の「あり」と連り、約つて「ざり」となることが多い。
見ざりき。
知らざる人。

「又」は「知ラン」「言ハン」などと、音便で「ン」ともなる。

○使役の助動詞の「す(セル)」「さす(サセル)」「しむ(シメル)」の下に、受身の助動詞の「らる(ラレル)」を添へれば、左例のやうに、他に役せられる意となる。これを熟合した一の助動詞と見做して、被役の助動詞ともいふ。

弟に靴を磨かす。(磨カセル)……(使役)

兄に靴を磨かせらる。(磨カセラレル)……(被役)

弟に名案を考へさす。(考ヘサセル)……(使役)

兄に名案を考へさせらる。(考ヘサセラレル)……(被役)

次男に庭を掃かしむ。(掃カシメル)……(使役)

父に庭を掃かしめらる。(掃カシメラレル)……(被役)

○又、この「す(セル)」「さす(サセル)」「しむ(シメル)」は、使役の意味から轉じて崇敬の意を表はす助動詞としても用ひら

れる。この場合には、下に「らる(ラレル)」「給ふ」などの語を添へて、熟合させて用ひられるものである。(三三頁三、四頁参照)

殿下は和歌を好ませらる。(好マセラレル)給ふ。

天皇も臨幸せさせらる。(臨幸セサセラレル)給ふ。

皇太子御位に即かしめらる。(即カシメラレル)給ふ。

○以上は、助動詞が主に動詞に添はる有様について述べたのであるが、助動詞は、又、他の助動詞の下にも添はるものであることを忘れてはならない。但し、助動詞の中には、その性質上互に相連続しないものもあると知れ、左にその連続のさまを二三例示しよう。(附表参照)

未然形の 書く	書か	未然形の す	せ	連用形の らる	られ	連用形の た	たり	連用形の き	き
未然形の 覺ゆ	覚え	未然形の さす	させ	連用形の らる	られ	連用形の た	たり	連用形の し	し
未然形の 言ふ	言は	連用形の しむ	しめ	連用形の し	し	連用形の なる	なる	連用形の べし	べし
									事あり

◎左の文中から助動詞を抽出して、それが何形の語形に表はれて居るかを答へよ。

- 一 日の暮れぬ間に急いで歸らう。(口)
- 二 それは云ふべくして行はれないことだ。(口)
- 三 彼は働くらしく見せては居るが、實は懶けて居るのだ。(口)
- 四 甲に筆を執らせて、乙のいふ所を書き取らしめた。(口)
- 五 飯も食はれる、茶も飲まれると云つて、少しも病に注意せられない。(口)
- 六 空は曇りたれど、雨は降るまじと思はる。(文)
- 七 父母の死なれし後は、祖母の手に養育せられて人となれり。(文)
- 八 古人の言のごとく、げに口は禍の門とこそいふべけれ。(文)
- 九 民富み、國榮えたりしかば、天下平かに治りき。(文)
- 一〇 今はこの山奥に、古くより住める人は一人もあらずと語られけり。(文)

一六 注意すべき助動詞助詞の用

法(附表)

○我等は自然に我が國語の法則を會得してゐるから、實際の應用に當つては、助動詞・助詞の用法なども、大方誤ることはないが、中には時代によつてその文法を異にするために、迷ひ易いものも少くない。次にその主なるものを擧げて、これを説明しよう。

○「らる(ラレル)」が佐變活用の動詞に添はる時は、「罰せらる(罰セラレル)」「訓誠せらる(訓誠セラレル)」などといふべきであるが、今文ではこれを約めて、「罰さる(罰サレル)」「訓誠さる(訓誠サレル)」などとも用ひられる。

○「さす(サセル)」が佐變活用の動詞に添はる時は、「周旋せさす(周旋セサセル)」「説明せさす(説明セサセル)」などといふべきであるが、今文では「せ」を略して、「周旋さす(周旋サセル)」「説明さす(説明サセル)」などとも用ひられる。

○「しむ(シメル)」が下二段活用の動詞の「得」に添はる時は、「得しむ得シメル」といふべきであるが、今文では中に「せ」を加へて「得せしむ得セシメル」とも用ひられる。

○「きは(盛なりき)」「衰へざりき」などと、「き」(終止形)でいひ切るものが正しいのであるが、今文ではこれを「盛なりし」「衰へざりし」などと、「し」(連體形)でいひ切ることもある。

○右の「き」の活用の「し」「しか」が四段活用の動詞に添はる時は、「殺ししに」「過ししかば」などといふべきであるが、

今文ではこれを「殺せし」に「過せしかば」などとも用ひられる。

○又、「き」が加變活用の動詞の「來」に添はる場合には、その活用の「し」「しか」に續けて、「來し」「來しか」とも、「來し」「來しか」ともいはれるが、「來き」とはいはれない。又、「き」は左變活用の動詞の「爲」に添はる場合には、「爲し」「爲しか」「爲き」といはれる。(附表)

○「り」は、「書を読み」「恩を報ぜり」などと、四段・佐變の兩活用の動詞に限つて添はる助動詞であるが、今文では「異なり」といふ形容動詞にも、この「り」を添へて「その形異なれり」「異なれる趣あり」などと用ひられる。

○「べし」「まじ」「らむ」「らし」は、動詞・助動詞などに添はつて、

「り」を左例のやうに用ひるのは誤である。
愉快を覺えり。
清き水流れり。
これ等は「覺えたり」「流れたり」などといふべきである。

「上皮は捨つべし」「御恩は忘るまじ」「幾世か経らむ」「夜も明くらし」「過言なるべし」「容易に欺かるまじ」「様子を見さすらし」などと用ひられるものである。

○「や」「か」は、動詞・形容詞・助動詞などを受けて、「兄弟ありや」「兄弟あるか」「葉も美しや」「葉も美しきか」「夜は眠らるや」「夜は眠らるるか」などといひ、そして、上に疑の語のある時は、「甲乙いづれを選ぶか」「赤と白といづれが善きか」「彼は何處の人なるか」などと、必ず「か」を用ひて、「や」を用ひないのが古來の語法であるが、今文では、上に疑の語の有る無しなどに拘らず、「か」の代りに「や」を用ひて、「兄弟あるや」「葉も美しきや」「夜は眠らるるや」「甲乙いづれを選ぶや」「赤と白といづれが善きや」「彼は何處の人なるや」

「べし」「まじ」「らむ」「らし」を左例のやうに用ひるのは誤である。
上皮は捨つるべし。
御恩は忘るるまじ。
幾世か経るらむ。
夜も明くるらし。
容易に欺かれまじ。
様子を見さすらし。

などとも用ひられる。

○「な」は動詞助動詞などを受けて、「門を閉づな」「水を留むな」「餘り早く來な」「長上を輕蔑すな」「人に欺かるな」「誰にも見さすな」などと用ひられるものである。

○「ぞ」「や」「か」が文の中に挿入される時は、左例のやうに、その文の末を動詞・形容詞・助動詞などの連體形で結び、又、こそが文の中に挿入される時は、その文の末を動詞・形容詞・助動詞などの已然形で結ぶのが古來の語法である。これを係結かひやくの法といふ。

人影ぞ見ゆる。	秋ぞ悲しき。	夢にぞありける。
人やある。	夜や深き。	道や惑へる。
何をか考ふる。	何れか善き。	誰かいひたる。

文語では、「な」を左例のやうに用ひるのは誤である。門を閉づるな。水を留むるな。餘り早く來るな。長上を輕蔑するな。人に欺かるな。誰にも見さすな。

古文には、「ぞ」と同じ意味に用ひられる「なむ」といふ助詞がある。そして係結の用法も「ぞ」と同様である。待人なむ來る。知る人なむ多き。心なむ勝りける。

秋こそまさされ。名こそ惜しけれ。疑こそ起りけれ。文語では、この係結の法によらなければ誤とせられるが、ただ文語でも、左例のやうに、その結となる語を直に下にいひ續ける場合には、この法則によらないものである。

雪かとぞよそには見れど梅の花、折りては似たる色なかりけり。

合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計ひいかがあるべき。

○「と」は動詞・助動詞などを受けて、「月出づと見えたり」「事務を執らしむといふ」などといふべきが古來の語法であるが、今文では、「月出づると見えたり」「事務を執らしむるといふ」などとも用ひられる。

口語にも「こそ」の係はあるが、これに對する特別の結法はない。これこそ珍品である。虎よりも苛政こそ真に恐るべきものだ。

○「と」は、又、「日本」と「支那」と「米國」との関係。「墨」と「雪」との差あり。「朝の眺」と「夕の眺」とは同じからず。などと、二以上の語句を重ねる時は、その各の語句に添へるのが古來の語法であるが、今文では、最終の「と」を省いて、「日本」と「支那」と「米國」の関係。「墨」と「雪」の差あり。「朝の眺」と「夕の眺」は同じからず。などとも用ひられる。しかし、左例のやうに、兩様の意味に解されて誤り易いものは、必ずその用法を正しくしなければならぬ。

昨日は叔母と伯父^との家を訪ねき。

この新聞は日曜日と大祭日^との翌日は休刊す。

右の「と」の用法は、口語でも同様である。

○口語の「ヤ」「ヤラ」「シ」「タリ」「トカ」なども、又、二以上の語句

「と」は、口語でも文語と同様に「墨と雪と」ノ差ガアル」とも「墨と雪と」ノ差ガアル」ともいはれる。

を重ねる時に用ひられるもので、左例のやうに、その各の語句に添へていはれる。(四七頁脚注参照)

桃ヤ櫻ヤ椿ヤイロイロノ花ガ咲イテ居ル。

踊ルヤラ跳ネルヤラ大騒デアツタ。

庭ハ廣イシ家ハ新シイシ良イ住居デアル。

寒カツタリ暑カツタリシテ悪イ時候ダ。

書ヲ讀ムトカ字ヲ習フトカシテ日ヲ暮ス。

右の中、「ヤ」は最終の「ヤ」を省いても用ひられる。

猫ヤ犬ヤハ肉類ヲ好ム。

顔ヤ手ヤニカスリ傷ヲ負ウタ。

○「ば」は動詞・形容詞・助動詞などの未然形と已然形とを受けて、その未然形を受ける時は假定の意を表はし、已然形

「タリ」「トカ」を左例のやうに用ひるのは誤である。
雨ガ降ツタリ風ガ吹イ
タリシテ悪イ年ダ。
適宜ノ運動ヲスルトカ速
足ヲスルトカシテ身體ヲ
鍛ヘナケレバナラナイ。

を受ける時は確定の意を表はすものである。随つて、左例のやうに、それに相應する意を下にいひ表はすべきものである。

風吹かば花散らむ。

風吹けば花散らむ。

運よくば勝たむ。

運よければ勝たむ。

犬も吠えずば憎まれじ。犬も吠えねば憎まれじ。

然るに、口語では、「ば」が未然形を受けることは少く、假定の場合でも、多くは已然形を受けるものである。

刻限ニ間ニ會ヘバ急ガウ。

路ガ遠ケレバ止メヨウ。

愚痴ヲイヘバ笑ハレル。

思慮ガ浅ケレバ侮ラレル。

上を假定にいふべき場合に、「ば」を左例のやうに用ひるのは誤である。

明日好天氣なれば遠足せむ。

御暇に候へば御來遊下されたく候。

上の條件が確定の場合には、これに應ずる下の語は、確定にもいはれ、假定にもいはれる。

口語で「バ」が未然形を受けるのは、助動詞の「タラ」「ナラ」「ヤウナラ」などの下に添はる場合である。

雨ガ霽レタラバ行カウ。
一人ナラバ行クノヲ止メヨウ。
マダ水ノヤウナラバモツト温メヨウ。

○「とも」は動詞・助動詞などを受けて、「死ぬとも」「殺さるとも」などといふべきが古來の語法であるが、今文では、「死ぬるとも滅罪せじ」「殺さるとも白狀すまじ」などとも用ひられる。

○「とも」と「ども」とは、今文では往往略して「も」とし、左例のやうに用ひられることが多い。

終日働くも働くとも厭はじ。

數日を経たるも経たれども歸り來ず。

草案は會議に附するも附すとも公表せず。

右の「働くも」「経たるも」などのやうに、誤解を生じないものは差支ないが、「附するも」のやうに、兩様に解されるものは、その用法を正しくしなければならぬ。

○以上は助動詞・助詞の用法の中で、特に誤り易いものを擧げて、その大要を説明したのであるが、なほ實際に文を書く時などには、種種の誤解が生じ易いものであるから、讀本講讀の際などに、一一實例について十分考究して見るがよい。

◎左の文中の施線の助動詞・助詞の異同を辨じて見よ。

- 一 (イ) 生き残りしもの。
- (ロ) 生きとし生けるもの。
- 二 (イ) 人の子たるもの。
- (ロ) 日の暮れたるころ。
- 三 (イ) 先ごろより見知りぬ。
- (ロ) 嘗て見知りぬ人。

- 四 (イ) 國のために死ね。
- (ロ) 見もせねば聞きもせず。
- 五 (イ) 及ばざるは過ぎたるにまさる。
- (ロ) 風は風ぎたるに波は收らず。
- 六 (イ) 花よりも木ぶりこそよけれ。
- (ロ) 口先は強きも内心は臆病なり。
- 七 (イ) 風こそ烈しかりしか。
- (ロ) 路遠かりしかば、いたく疲れたり。
- (ハ) 何事もなかりしか。
- 八 (イ) 異國にもかかる事ありや。
- (ロ) 面白き景色なりや。
- 九 (イ) 怠らず勉められよ。
- (ロ) 夢にも思はざりしよ。
- 一〇 (イ) あるじなしとて春を忘るな。

- (ロ) 花の色はうつりにけりな。
- (ハ) 雨霽れなば峠を越ゆべし。

◎左の文中の誤を指摘して見よ。

- 一 吾は終夜眠らずして考へり。
- 二 君は今年何歳にならるか。
- 三 人夫に荷物を運ばして峠を越えぬ。
- 四 輕輕しく斷行するな。冷靜に考へて見べし。
- 五 志を達しし彼は、數年を経て故郷に歸り來き。
- 六 彼はいかに訓誡するも改悛せられまじ。
- 七 質問に答ふこと能はぬほど、赤面することはなし。
- 八 身は千里を隔てりとも、心はなか通じざらむや。
- 九 私欲を制することは難く、放逸に流ることは易し。
- 一〇 腐敗ししものを食へば、必ず胃を害さむ。

- 一一 諺にも、鳥も鳴かざれば撃たれまじといはれたり。
- 一二 暇あれば勉強せむといふものは、暇ありても勉強せぬ人なり。

○表中の括弧内の助詞は、多く今文にのみ用ひられるものである。

詞容形		未然形
志久活	久活	
美しく	清く	
ば		
美しく	清く	連用形
とも		
美し	清し	終止形
や		
美しき	清き	連體形
にまが(やか)		
美しけれ	清けれ	已然形
どどば		
ども		

詞 動						
良	奈	佐	加	下	上	下
變	變	變	變	一段	一段	二段
有	死	爲	來	蹴	見	留
ら	な	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	め
てば						
有	死	爲	來	蹴	見	留
り	に	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	め
つて						
有	死	爲	來	蹴	見	留
り	ぬ	ゝ	ゝ	る	る	む
な						
ととや						
有	死	爲	來	蹴	見	留
る	ぬ	る	る	る	る	む
な						
にまが(とも)(とやか)						
有	死	爲	來	蹴	見	留
れ	ぬ	れ	れ	れ	れ	む
どどば						
ども						
有	死	爲	來	蹴	見	留
れ	ぬ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	め
よ						

動詞・形容詞と助動詞・助詞との連続

◎この附表には文語の助動詞・助詞のみを掲げた。口語はこれに準じて知れ。

◎助動詞と助動詞・助詞との連続も、上の動詞・形容詞に助動詞の添はつたものを一の熟合した連語の動詞・形容詞と見做せば、この表によつて自らその連続のさまが推知される。(動詞に助動詞の「たし」「べし」「まし」「らし」が添はつたものは、形容詞と同形に活用するから、これを連語の形容詞と見做せばよい。)

一 動詞・形容詞と助動詞との連続

詞		動															
加	佐	下	上	下	上	良	奈	四									
變	變	一	一	二	二	變	變	段									
來	爲	蹴	着	受	起	有	死	讀									
未			然			未		然									
形			形			形		形									
さす　　らるる　　する																	
むじず　　しむ																	
	來	爲	蹴	着	受	起	有	死	讀								
連			用			連		用									
形			形			形		形									
き																	
	來	爲	蹴	着	受	起	有	死	讀								
終			止			終		止									
形			形			形		形									
たけけたり　　めつ　　しむりり																	
	來	爲	蹴	着	受	起	有	死	讀								
連			體			連		體									
形			形			形		形									
ららまべ　　しむじし																	
	來	爲	蹴	着	受	起	有	死	讀								
連			體			連		體									
形			形			形		形									
ららまべ　　しむじし																	
	爲								讀								
命			令			命		令									
形			形			形		形									
ごなし　　たり																	
り																	

詞		動							
佐	加								
變	變								
爲	來								
未		然							
形		形							
し	しか								
爲	來								
連		用							
形		形							
き	しか								

詞		形容							
志	久								
久	活								
正	高								
し	き								
ご	なり								
と	し								

二 動詞・形容詞と助詞との連続

詞		動															
良	奈	佐	加	下	上	下	上	四									
變	變	變	變	一	一	二	二	段									
有	死	爲	來	蹴	見	留	落	富									
ら	な					め	ち	ま									
未			然			未		然									
形			形			形		形									
てば																	
	有	死	爲	來	蹴	見	留	落	富								
	り	に				め	ち	み									
連			用			連		用									
形			形			形		形									
つて																	
	有	死	爲	來	蹴	見	留	落	富								
	り	ぬ			る	る	む	つ	む								
終			止			終		止									
形			形			形		形									
な																	
	有	死	爲	來	蹴	見	留	落	富								
	る	ぬ	る	る	る	る	む	つ	む								
連			體			連		體									
形			形			形		形									
な																	
	有	死	爲	來	蹴	見	留	落	富								
	れ	ぬ	れ	れ	れ	れ	む	れ	め								
已			然			已		然									
形			形			形		形									
どどば																	
	有	死	爲	來	蹴	見	留	落	富								
	れ	ぬ	れ	れ	れ	め	ち	め									
命			令			命		令									
形			形			形		形									
よ																	

◎表中の括弧内の助詞は、多く今文にのみ用ひられるものである。

Copyrighted material

不在此限

Copyrighted material

Copyrighted material



Small, illegible text or markings on the left edge of the page, possibly a library or archival label.